未定

恫向むいく

１．告白

「ねえ萩原（はぎはら）くん、ちょっといいかな。」
　時は九月某日。高校生活最初の夏休みがあけて、一週間くらい(つまり、俺は高校一年生)。
　今日もなんとか四時間目の授業が終わり、俺はいつものように早めに昼食を食べ終え、午後の授業が始まるまでの間に少しでも休息を取ろうと、机につっ伏してうとうとしていた。
　ふと、教室が騒がしくなったような気がしたが、睡魔には勝てない。
　意識が遠のきそうになったその時、ふいに名前を呼ばれ、頭をぽふぽふと優しくたたかれた。
「…っ！、なんだ、…よ？」
　いらだたしげに勢いよく顔を上げた俺は、面食らってしまった。
　声をかけてきたのは、俺の一つ上の先輩、尾上 恭(おがみ きょう)先輩だった。背は一般的な女子並みなのに、成績優秀で運動神経も抜群。さらに小さな顔に整った目鼻立ちで、少し長めの髪がさらさらとした、恐ろしいほどの美少年だ。もちろん、女子からの人気はすこぶる熱く、ファンクラブまであったり、毎日のように告白されたりなんてしてるらしい。
　反対に、男子のなかには尾上先輩のことを快く思っていないやつが少なくない。その背の低さから、まるで中学生のようなやつに、勉強も運動も勝てず女子からの人気まで取られる、そりゃあ嫉妬しちゃうよな。それに、先輩はおとなしい性格だから、みんな余計腹が立つんだろう。
　まあそんな、雲の上にでもいるような存在の尾上先輩に話かけられていたと知って、俺はすごく驚いた。どおりで教室中が騒がしいはずだ。
「…っじゃなくて！俺に、何かご用でしょうか？」
　先ほどの先輩への返答をタメ口でしていたことに気づき、あわてて言いなおす。先輩はおかしそうに、くくっと笑った。
「ちょっと君と二人だけで話したいことがあるんだ。ついて来てくれるよね。」
　そういうと先輩は、これ以上の問答は無用とでもいうように俺の腕をしっかりとつかんで歩き出した。女子たちが騒いでいる中、完全にあっけにとられていた俺は、だた先輩に手を引かれるままついて行くことしかできなかった。

　「ここなら、誰もこないだろう。」
　おっかけを入念にまいた後、階段をいくつか上り終えると、俺たちは目的地へとついたようだった。先輩はポケットから取り出した鍵で扉を開けた。中へ入ると、先輩はようやくつかんでいた俺の腕を離した。
　俺が連れてこられたのは屋上だった。柵がなく危険、ということで普段は鍵がかかっていて立ち入り禁止になっている場所だ。先輩レベルに優秀だと、こんな場所でも鍵は簡単に借りられるのだろう。もちろんこの場所には僕ら以外には誰もいなかった。こんな場所じゃないとできない話ってなんだ？まさか、暴行されたりはしないだろうか。まあ、そんなことをされる覚えは全く無いんだけど。

　だんだん不安になってきた俺は、すぐ逃げられるよう出入り口から離れないようにした。
「で、尾上先輩。一体俺に何の話なんですか？」
　言いながらキッと睨み付けた俺を見て、先輩は安心して、とでも言うように天使のような笑顔を見せた。
「萩原くん。」
　そう言うと先輩は微笑むのを止めて、真顔で俺の頬に手を伸ばしてきた。
「？」
　そろり、と頬を撫でられた。その手は氷のように冷たくて、背筋が少しぞくっとした。
「先、輩？」
「萩原くん、僕はね…」
　先輩の顔は、まるで酒にでも酔ったかのようなうっとりとした笑みを浮かべた。とても綺麗な笑みなのに、それが悪魔のもののように思えた。
「僕はずっと、君のことが好きなんだ。」
「はぁ！？…っぐ！」
　先輩は一瞬の内にその手で俺の顔を引き寄せると、驚きに開いてふさがらない俺の口の中に、唇を押し付けてきた。
「ん、なっ何しやがるんだ！」
　俺は、先輩を力いっぱい突き飛ばして、一目散に屋上を後にした。

　走って走って、誰もいないトイレの、個室に駆け込む。俺はいつの間にか泣いていた。泣きながら唇を強くこする。先輩の唇の感触が思い出されて、胸の中がモヤモヤっとした。同姓とキスをした、という不快感だ。しかも、よりにもよってファーストキス…。
　ふいに、コツ、コツ、コツ、と、足音が聞こえて俺はぎょっとした。先輩がついてきたのだろうか…。
　足音は、俺のいる個室の前で止まった。
「お～い、萩原！どうした？」
　この声は…。
「佐藤、か？」
「あ～？おぉ、俺だよ俺。お前がさ、すごい勢いでトイレ入って行くからびっくりしてよ。腹でも下したのか？だっせぇな！」
　やっぱり、声の主はクラスメイトの佐藤初（さとう はじめ）だった。言葉づかいが乱暴で金髪だからガラの悪い不良みたいなやつだけど、みんなに分け隔てなく優しくて結構人気がある。そして、俺の数少ない友だちのひとりだ。
「う、うるさいな。お前の言うとおり、俺は腹が痛いんだ。わかったらさっさと教室戻ってろ。」
「あ～？せっかく俺が心配してんのになんだよその態度は。ま、午後の授業無理そうならちゃんと保健室行けよ。先生には俺から言っとくからさ。萩原はいつもの拾い食いで腹壊したそうで

〜すってな！」
　なんてふざけた言葉と笑い声がドア越しに聞こえた。
「俺、拾い食いなんて一度もしたことねーんだけど。」
　俺もつられて笑っていた。佐藤と話したおかげか、さっきの不快な気持ちはどこかへと消えている。
「んじゃ、俺そろそろ教室戻るわ。お大事に、な。」
「ああ。」
　返事をすると、佐藤の去っていく足音が聞こえた。
　完全に足音が聞こえなくなった後、俺は大きなため息をついた。
　声で、泣いてたことばれたかな。腹痛すぎて泣いてるなんて思われてたらどうしよう。まあ、それよりあいつにいろいろ聞かれずにすんで良かった。なんて、いろいろ考えてたら、
「お〜い、萩原！」
佐藤の呼び声。
「…なんだよ。まだ何かあるのかよ。」
「いや、さ。そういえばお前さっき、尾上先輩に呼び出されてたじゃん。あれ、何だったんだよ？」
「べ、別に。なんでもなかった。」
ギクッとした。あのとき佐藤は教室にいたのか。
「は？何でもなかったってなんだよ？」
「う、うるさい！だから、なんでもなかったんだよ！お腹痛いんだから話かけんなよ！出てけ。」
「あ、あぁ。そうだったな。すまん…。じゃあ。」
　俺は、ふと、こいつになら相談してもいいかと思った。もちろん、俺と先輩にあったことってのは伏せるけど。
「なぁ、佐藤。」
「あん？んだよ。」
「もしも、だよ。もしも同姓からさ、好きって言われて、んで、き、キスされたら、どうする？」
「はぁ！？お前まさか、尾上先輩にそうされたなんて言うんじゃねーだろうな？」
げっ！？なんでこんなときに勘がさえてんだよこいつ…。
「ちげぇよ、バカ。もしもだって言ってるだろうが。」
「そうだなぁ…。お前それドッキリなんじゃねえの？」
「は、ドッキリ？」
「んなありえねえこと、ドッキリに決まってんだろ。」
「あ。」
　そうか、なんでその線を考えなかったんだろう。
「へぇ〜、羨ましいやつだなぁ。あんな可愛い先輩にキスされただなんて、女子が黙ってねえな

、萩原。」
「女子が、な。でもさ、なんでよりにもよって俺なんかにドッキリなんてしかけんだよ？意味わかんねぇ。」
「あぁ、確かにな。まぁ、そんな気にすることじゃねえよ。教室、戻ろうぜ。」
「あ、おう。」
　個室のドアを開けると、面白いものでも見つけたような佐藤の顔があった。
「なあ、尾上先輩の唇ってどんな感触だった？」
「…超、柔らかかったぜ。」
　なんて、笑顔で答える俺に、俺自身、驚いた。
「はっは～、マジかよ。ちょっと羨ましいな。尾上先輩レベルだったら野郎でも俺全然オッケーなんだけど。」
「うわ～。佐藤そういう趣味だったのかよ、俺に近寄らないでくれるか？」
「なっ、お前レベルは普通に無理だから！自惚れてんなよハゲ！！」
「なんだと！お前の方が髪短いだろ、バ～カ！！はははは！」
　さっきまであんなに気持ちがふさぎこんでいたのに、今はとってもすがすがしい気分だ。先輩にキスされたことだって全然気にならなくなったし、むしろ良い経験になったのかもしれない。佐藤が友だちで、本当に良かった。
　そうして俺たちは、ふざけ合いながら教室へと戻って行ったのだった。